海鳴り

下巻

藤沢周平

海鳴り

下巻

藤沢周平

文藝春秋

海鳴り（下巻）

昭和五十九年四月十五日　第一刷
昭和五十九年五月二十日　第二刷

著　者　藤沢周平（ふじさわしゅうへい）
発行者　半藤一利
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表（〇三）二六五―一二一一
定　価　一〇〇〇円
印　刷　共同印刷
製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

© Shuhei Fujisawa 1984　Printed in Japan

海鳴り・下巻・目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

仄かな光　七
裏切り　五七
おたね　六
火の花　三三
遠い稲妻　一五九
秋の声　一六九
破滅　一九〇
野の光景　二三八

装釘・谷澤美智子

海鳴り・下巻

仄かな光

一

芝の帳屋桝屋の主人多四郎は、店の外まで新兵衛を見送って来た。上機嫌だった。

新兵衛は今日桝屋をたずねると、小野屋から桝屋におさめている雁皮紙の卸値を半値に落とし、そのかわりにほかの紙は以前の値段のままで卸すことで、こじれていた取引の折り合いをつけたのである。

手代の倉吉を使って、今年に入ってから桝屋では雁皮紙にいいとくい先がつき、売り上げをのばしていることをつかんだ上で持ち出した条件なので、桝屋ではその話にあっさりと乗って来た。これで、桝屋が森田屋と手を切るかどうかはべつにして、少なくとも小野屋の取引は旧にもどったわけである。雁皮紙は、値を落としても土台納める量が少ないので、小野屋の商いにさほどひびくわけではないが、新兵衛は恩に着せた言い方をした。

「森田屋さんには、くれぐれも内緒にねがいますよ」

と新兵衛は言った。

「いえ、森田屋さんだけでなく、ほかの同業にも、どうぞご内聞にねがいます。わたしはこちらさんのご商売によかれと思ってこの取引を持って来たわけですが、雁皮をこの値段で卸したなどと知られたら、同業のみなさんに袋叩きにされますからな」

「もちろん、もちろん」

桝屋の主人は、あばたが浮いている細長いあごを振って合点した。秘密めかした笑顔で新兵衛を見た。

「そんなことをあなた、よそに洩らすものですか。あたしだって商人ですよ、小野屋さん。せっかく儲けさせて頂くというのに、ほかにしゃべるわけはございません。これはあくまでも二人だけの取引です」

「では、ほかの品は約束のお値段でよろしく」

「承知いたしました。ご心配なくどうぞ」

頭を下げてから、桝屋の主人はあたりの暗さに気づいたようだった。空を見上げた。

「おや、これはひと雨来そうですよ、小野屋さん。傘をお持ちください」

「まだ大丈夫でしょう」

「いや、いや。妙に暗いと思ったら、これは雨です」

桝屋の主人は、せわしなく奉公人を呼び立てると、新兵衛に傘を持たせた。機嫌よく送り出した。

ひと雨来ると言った桝屋の主人の言葉はあたって、新兵衛がまだ田川町の通りを歩いてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

るうちに、雨が降りはじめた。

霧のように音も立てない雨だったが、みるみる地面が濡れ、日暮れの町は急に暗くなった。前後にひとが走る音がするのは、曇ってはいたものの急に雨になるとは思わなかった者が多かったせいだろう。

誰かが、雨だよと叫び、どこかで樽のようなものが崩れる物音がした。

――駕籠にしようか。

新兵衛は、傘のうちから前後を見たが、駕籠が来る様子はなかった。雨は強くなるとみてか、空き駕籠も歩いていないようである。

仕方なく、新兵衛はそのまま芝口にむかう通りを歩いて行った。雨は少しずつ強くなり、空は暗くなる一方で、町はそのまま夜に入る気配だった。しかし寒くはなく、濡れた空気はいくぶん生あたたかいほどである。

一時はさわがしかった路上からだんだんに人影が消え、新兵衛が歩いているうちに道は静かになった。かわりに本降りに変った雨の音が耳につき、ひっそりした道にはまばらな人影が動くだけになった。道の両側につづく商家では、いつもより早い日暮れにあわてて、一斉に灯をともしていた。濡れた道に灯影がまぶしく映っている。足もとを濡らさないように用心しながら、新兵衛はゆっくり歩いて行った。桝屋との駆け引きがうまく行ったので、気分がいくらか昂っている。神田まで歩くのかと思うとうんざりするが、べつにいそいでもどることはなかった。ゆっくりと帰ればいい。

――桝屋の方が話がついたと知れば……。

ほかの二軒も、多少は出方が変って来るのではないかと、新兵衛はいくらか楽観的な考えになっている。

小野屋から森田屋に寝返った三軒の帳屋のなかで、一番利にさとく油断のない商いをするのは桝屋の主人多四郎である。だから新兵衛は雁皮紙半値卸しなどという、思い切った取引を持ち出したのだが、築地の小倉屋、伊勢屋の二軒は、それほどのことはない。

二軒とも、義理を重んじることも知っているし、商いもおっとりしている方である。新兵衛自身が出向いてじっくりと説得すれば、森田屋と手を切るまではいかなくとも、何とか元の取引にもどせそうである。しかしそれにしても……。

「何かの手みやげはいるだろうな」

新兵衛は思わずひとりごとを洩らし、自分の声におどろいてはっと顔を上げた。あたりを見回したが、新兵衛の声を聞きとがめるほどの近間を歩いている者はいなかった。

新兵衛はまた足もとに眼を落とした。だがそのとき、何か気になるものが頭に残ったようである。新兵衛はもう一度顔を上げて、うしろを振りむいた。気がかりなものは、すぐに見つかった。通りすぎた商家の暗い軒下に、雨やどりして立っているひとがいる。女だった。

斜めの向い側の店のうす明かりが射すだけで、顔もはっきりとは見えないのに、新兵衛にはひと眼でわかった。女は丸子屋のおかみ、おこうだった。新兵衛はいそいで引き返した。

「おこうさん、どうしました？」

「ああ、小野屋さん」
おこうは顔を上げて新兵衛を見ると、弱々しく微笑した。その力のない笑顔は新兵衛の胸をつらぬいた。新兵衛は声をひそめた。
「どうしたのです？　雨やどりですか？」
「ええ」
「どちらへいらっしゃる？　それともお家に帰る途中ですか？」
新兵衛は、注意深くおこうの顔を見つめながら言った。おこうに、これまで見馴れて来たきりっとした感じではなく、どことなくぼんやりと放心した気配があるのに気づいている。
問われて、おこうはふとわれに返ったような眼で、新兵衛を見た。小さくうなずいてから言った。
「ええ、家にもどるところですけれども……」
「それじゃ、傘におはいんなさい。そばまで、送りますよ」
「ありがとうございます」
おこうは他人行儀に言った。だが、そう言っただけで、おこうは新兵衛がさしかけた傘には入って来なかった。むしろ拒むように、ぴったりと閉まっている店の大戸の方に身をひくようなしぐさまでした。
「どうしたのです？」
新兵衛は少し強い口調で言った。いっとき灯をともしている道脇の店も、間もなく灯を消

して戸を閉めはじめるだろう。雨が降る暗い町に、おこうをおき去りにして行くことは出来なかった。

「この雨は、すぐには止みませんよ。さあ、行きましょう」

新兵衛は手を出した。するとおこうは、その手にすがるようにして、やっと新兵衛の傘の中に入って来た。

新兵衛はほっとした。歩き出してからそっとおこうを盗みみると、おこうは足もとに眼を落とし、身をすくめるようにして歩いていた。だが片手は、新兵衛が持っている傘の柄を、すがりつくように握っている。二人はしばらく無言で歩きつづけた。

「すみませんでしたな、おこうさん」

源助町を通りすぎたところで、新兵衛は言った。

「あなたにお便りしなければいけなかったのですが、いろいろとせわしないことがつづきましてな」

「いいんです」

おこうが小さな声で言った。

「小野屋さんに、ご迷惑はかけられませんから」

「いや、そういうことじゃないのだが……」

新兵衛は言ったが、そこで口をつぐんだ。おこうの言葉が、自分の胸にある世間をはばかる臆病な気持を、ぐさりと突き刺したのを感じたのである。

――このひとは……。

裏切られたと思っているかも知れないな、と新兵衛は思った。そう思われても仕方なかった。江戸橋の南の暗い路上で、心を通わせるしるしを交し合ったあとで、ぷっつりと音沙汰がないままに、二十日ほども日が経ってしまったのである。

だが、その間新兵衛は、おこうを忘れていたわけでも、気にかけなかったわけでもない。おこうの姿は絶えず頭の中にちらつき、時には一切の分別を捨てて、忍び会う段取りをつけようかと、気持が昂ぶることもあったのだが、踏み切るには強い迷いがあったというだけのことである。

――男と女は、ちがう。

と新兵衛は思うことがある。女子の見るところは狭くて、見えているのはせいぜい家の中と、わが身のつき合いがある限られた世間といった程度だろう。

だが男の眼は、家のことはむろん、同業仲間や取引先といった商いにつながる世界から、さらにその回りにあるひろびろとした世間まで、いやおうなしに見てしまうのだ。それが見えないようでは、のれんをさげた商いなどは出来るわけがなく、そして見えるからには自分もまた世間に見られているのだというわきまえがなくては、一人前の分別をそなえた男とは言えないのである。

新兵衛は世間がこわかった。奉公先の治吉をはなれて紙の仲買いに踏みこみ、さらに問屋仲間に加わるまでに、新兵衛はさまざまな世間を見た。

たしかに世間には善意のひともいれば、悪意のひともいた。世間は時には悪意をむき出しにして襲いかかって来たが、稀には救いの手をさしのべても来たのである。渡る世間は鬼ばかりではなく、世間は善意と悪意の巨大な混淆物だった。

だが善意のひとも、一たん利害が対立すると、手のひらを返したように悪意に満ちた中傷をばらまいたりすることもめずらしくはなかった。つまり、と新兵衛はそのころ思ったものだ。無償の善意などというものを世間に期待するのはばかげていて、この世はむしろ悪意に満ち、隙があれば足もとをすくおうと待ち構えるひとがひしめいていると覚悟した方がいい。

それが、どうにか自分の才覚でまわりと折り合いをつけ、時には自分自身もひとの足をすくうような真似をして、きわどく世を渡っているうちに、商人である小野屋新兵衛の身についたさとりのようなものだったのである。

その中で得た一番の教訓は、ひとに弱味を見せてはならないということだった。世間に侮られず、憎まれずに世を渡ることはむつかしいことだった。だがかりに憎まれても、根性さえしっかりしていれば、商いが潰れるようなことはない。同業に憎まれながら大きくなった須川屋嘉助のような例もある。須川屋はひとの思惑など屁とも思わず、憎まれれば反発していっそう強もての商いをし、ついには誰も手がつけられない大物になった。

だが、ひとに弱味をにぎられ、侮られるようになると、商いはおしまいだった。あがくたびに商いは細くなり、ついには店が潰れるのだ。

須川屋とは逆の、そちらの例も新兵衛の記憶に残っている。相模屋孫八は、伊豆修善寺産

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.